東京国税局管内納税貯蓄組合連合会　優秀賞

「祖父から学んだ税の大切さ」

足立区立 第一中学校

三年　竹下　萌以

私は税金について考える時、祖父のことを思い出す。祖父は長年多くの人の税に関する相談に応じ、税金を正しく納めるための仕事に携わってきた。祖父はよく「税金はみんなでお金を出し合って、暮らしを支えるための大事なものだ。」と話してくれた。小さい頃は難しい話だと思っていたが、中学生になり税金について学ぶなかで、その言葉の意味が少しずつ分かるようになってきた。

税金には、消費税、所得税、住民税、固定資産税など、たくさんの種類がある。そして、それぞれが様々なサービスや施設に役立てられている。しかし、税金は家計への負担の大きさなどから、悪いイメージを持たれることが多い。それは、税金がただ取られてしまうものと思われ、その恩恵について正しく理解されていないからではないかと思う。

税金の使い道について詳しく調べてみると、教育、医療、福祉、警察、消防、道路、公園、公共施設、ごみ処理など、様々な場面で使われていることが分かった。普段当たり前に利用しているものが、多くの人々が納めた税金によって支えられていることに驚いた。

その中でも、私が最も身近に感じたのは医療と税金の関係だ。最近祖父に病気が見つかり、定期的に病院で治療を受けている。そのことをきっかけに、日本の医療制度にも税金が使われている

ことを改めて認識した。祖父は医療費の負担が軽くなる後期高齢者医療制度を利用している。この制度は、七十五歳以上の人が加入する公的医療制度で、医療費を税金五割、現役世代の支援四割、高齢者の保険料一割で支え合う仕組みだ。日本では少子高齢化が進み、お年寄りの人数が増加傾向にあるため、病院で治療を受ける人が増え、医療費が年々大きくなっている。もし、このような制度がなかったら、治療費はもっと高額になり、必要な治療を受けられない人が増えてしまうかもしれない。税金は、実は多くの人の命や健康を支える役割を果たしているのだと思う。

祖父の仕事や病気を通じて、税金は人と人を繋ぐ助け合いの仕組みなのだと感じた。税金がなければ、教育や医療などの公共サービスを十分に維持することが難しくなり、多くの人が困ることになる。税金はその恩恵が見えにくいからこそ、役割や意義を正しく理解して、社会全体で共有していくことが大切だと思う。

将来、私も税金を納める立場になる。税金の大切さや、そのことを教えてくれた祖父を想いながら、社会を支える一員として責任を果たしていきたいと思う。そして、年齢や立場に関係なく、誰もが安心して生活できる社会になってほしいと思う。